TALKING ABOUT OUR HOME TOWN

わが町・わが村を語る

小海町

八ヶ岳連峰に囲まれ「憩うまちこうみ」として都会に多くのファンを持つ小海町。町のシンボル松原湖高原スケートセンターでは、何人もの五輪選手を育て上げている。また、2018年4月に開通した中部横断自動車道八千穂高原インターは、多くの人を呼び込む起爆剤になっている。優れた地域資源を活用する主体こそ役場職員であると「挨拶」の徹底から役場改革を推し進める黒澤弘町長に、これからの地域づくり構想をお聞きした。

〈インタビュアー：長野経済研究所
理事・調査部長　小澤 吉則〉

南佐久郡のほぼ中央に位置し、佐久穂町、南牧村、南相木村、北相木村、茅野市に隣接する人口約4,700人の町。千曲川が南北に流れる

ラジオ体操・朝礼・挨拶で庁内を改革

小澤　2018年３月に町長に就任後、真っ先に取り組んだことは何ですか。

黒澤　行政は最大のサービス業だと思っています。ところが、役場に入ってみると、窓口で用を足せずに帰る町民がいた。そんな状態を改善して町民に確実にサービスを届けるために、朝礼で挨拶の練習をするなど、職員一人ひとりの意識の向上を図っています。一体感を持ってもらうために、朝のラジオ体操も始めました。

小澤　庁内の意識改革ですね。

黒澤　役場は150名を超える町最大の組織です。ここで働く職員が元気になれば、町全体の活性化につながるというのが私の信念です。体操で頭をリフレッシュして、１日になすべきことを見極め、何事も先送りせずに計画どおり仕事を遂行する。この毎日の積み重ねが、１年後、３年後の目標達成につながる。たとえ軽微な事柄も軽んじてはいけません。民間なら命取りになることもありますから、一つひとつの仕事を確実に完遂するよう朝礼で指導しています。

小澤　半年経って大きく変わったことは。

黒澤　建物の構造上、町民は正面玄関ではなく、駐車場から近い通用門から入ってきます。その場から見て、奥に何課があるか分かるように課名や係名を書いた大きな看板を天井から吊るしました。また、町民が来庁したら職員が先に挨拶をして「御用は何ですか」と声を掛ける。朝礼での挨拶はその準備体操です。「体操」、「朝礼」、「挨拶」が役場改革の基本です。

民間の発想で、職員のやる気を引き出す

小澤　経営者としての経験を生かして役場の改革に取り組んでいるのですね。

黒澤　最初は役場内のコミュニケーションが希薄で、互いに知識を共有したり、分からないことを聞ける雰囲気がなかった。新しい課に配属されたら、一から自分で書類をめくり仕事を覚え、異動の際は引継ぎをほとんどしない。民間の感覚からするとナンセンスな話です。せっかく得た知識を共有しないなんて、宝の持ち腐れじゃないですか。町民のニーズに応えていくには、スピード感が必要です。そのためにはコミュニケーションを密にして、分からないことは直ぐ

に聞いて、さらに課の垣根を越えてチームで仕事をしていかなければだめです。

小澤　そのための対策はどのように。

黒澤　まず個別面接を始めました。全職員に一対一で会って話を聞いています。一人30分程度ですが、すでにさまざまな建設的な意見が寄せられていて、改善すべき点は即座に対応するように心掛けています。それから、係長や課長を含めたミーティングも頻繁に行い、問題があればそこで議論できるようにしました。

小澤　分からなければ隣に聞けるような雰囲気が醸成されつつあるのですね。

黒澤　若手ほど、いろんな課を経験して勉強したいと言います。そういう人には適材適所の配置をしてどんどん力を発揮してもらう。行政マンは、この町では羨ましがられる職業なんです。だから、それなりに意欲的に取り組んでもらいたいし、そのほうが職員自身も生きた証を作ることができるはず。そういう意味でも職員がやる気を持って仕事ができる環境を作っていきたいと思います。

八千穂高原 IC 開通で企業誘致や観光振興を目指す

小澤　施策で力を入れていることは。

黒澤　町の中心部には佐久甲州街道（現国道141号）が通り、これに加えて2018年４月に太平洋側と日本海側を結ぶ中部横断自動車道が八千穂高原インターまで開通しました。交通量が飛躍的に増加しています。これをビッグチャンスととらえ、人口を増やしたいですね。

小澤　具体的には。

黒澤　小海町への移住定住者の増加を目指します。そのためには働く場が必要です。そこで企業誘致を推進するための渉外戦略室を庁内に立ち上げ、産業振興の柱となる製造業の誘致を積極的に行っています。

小海町 町長　黒澤 弘 氏

小澤　道路の開通は、観光客などの交流人口の増加にも期待できそうですね。

黒澤　町のシンボル、松原湖や八ヶ岳連峰に囲まれたこの町は、都会の人にとって「憩うまちこうみ」として人気を集めており、レストハウスふるさと、リエックス、八峰の湯などのレジャー施設を生かした観光事業にも力を入れていきたいと思っています。

また、国道141号沿いにバスターミナルや駐車場、トイレ、休憩所などを兼ね備えた「バスタ新宿」ならぬ「バスタ小海」を建設して、首都圏と小海町を直結し、都会から訪れる人々を周辺自治体へも誘導して、南佐久全体の観光や産業振興にもつなげていきたいという構想も持っています。

小澤　南佐久の玄関口として商店街の活性化も重要課題に掲げていらっしゃいますね。

黒澤　買い物は佐久平で済ませるという人が増えていますが、町の活性化のためにも個々の商店の魅力を高め、お客さまに来ていただかなくてはいけません。オール小海で商業振興に取り組むために、町民も巻き込んだ「まちづくり委員会」を立ち上げ議論を重ねていきます。

農産物のブランド化で儲かる農業を育てよう

小澤　農業も盛んですが、どのような活性策をお考えですか。

黒澤　小海町はレタス、白菜などの高原野菜の栽培が盛んで十万ケース単位で生産する農家もあります。ところが、今回の豪雨災害などで消費が滞ると廃棄が始まる。丹精込めて作ったものを、トラクターで踏みつぶすなんてとんでもないことです。そんな光景をなくすためにも、農産物のブランド化をJAや農家とともに推し進めていきたいと思います。

小澤　安く大量にから、高く適量で儲かる農業への転換ですね。

黒澤　建設会社を経営していたころは、月収100万円の大工を育てることを目指していました。農業は素人ですが、そんな経営感覚を農家にも持ってもらいたい。通常レタスは１個約100円ですが、500円で売れる価値のレタス作りは出来ないか、都会のデパ地下などで高級感あふれるような小海ブランドの野菜作りを行い、更に、特産品の開拓にも取り組みます。高品質のものを程よい量で栽培して、無駄なく、程よい値段で買ってもらえる、そんな農業を目指したいのです。

オリンピック選手も育てた スケート文化を守りたい

小澤　小海ブランドといえば、平昌五輪に地元小海高校からスピードスケートやショートトラックのトップ選手が出ましたね。

黒澤　菊池純礼選手と神長汐音選手です。スピードスケートの山中大地君や菊池純礼選手の姉で金メダリストの彩花選手も、松原湖高原スケートセンターで練習したんですよ。小海町にはスケート場のほかにスキー場もあり、冬のアスリートたちのための施設が充実しています。こんなところは長野県内では、当町のほか長野市と軽井沢町しかありません。これを活用して、小海町から世界へ羽ばたく人材をどんどん輩出して、町の知名度を上げてくれることを願っています。

小澤　この町は、スケートを中心としたスポーツのメッカでもあるのですね。

黒澤　19年２月に氷上トライアスロン30周年大会を開催し、６月には日本ノルディックウォーク連盟設立の10周年記念大会も行われます。これは私がトップセールスで誘致してきたもので、全国からノルディックウォークの指導者らが千人規模で集まる大きな大会になります。

小澤　競技施設の運営は採算が取れないとよく耳にしますが。

黒澤　当町でも、スケート場と小海町高原美術館の運営で採算を取るのは難しい状況です。それでも、私はあえて続行を宣言しました。あの軽井沢町も、文化施設の整備に１億円を投入しています。なぜあれだけの町がそうするのか。スポーツや文化を守るには、行政が先頭に立って存続に力を注がない限り後世に伝えていくことは難しいのです。

健康と長寿をサポートする健康福祉事業

小澤　健康や福祉面で大事にしていることは何ですか。

黒澤　高齢になっても病気を予防し、病気になっても重症化させない、いつまでも健康でいてもらうことが一番大切です。早期発見・早期治療につなげるために、年２回の健診には補助を出しています。今年の健康福祉祭りでは、私が町おこしのPRキャラクター「小海レンジャー」の一

人になって健康意識を高めるお手伝いをします。

また、この町は40歳以上の４割が高血圧症なので、血圧計を多くの場所に設置したり、全戸に高血圧対策の方法を印刷したトイレットペーパーを配ったりして、生活習慣病の予防を呼び掛けています。

小澤　高齢者福祉で力を入れていることは。

黒澤　高齢者の支援の面では、特別養護老人ホーム「こうみの里」が拠点となっていますが、元気な高齢者や要支援･低介護度のお年寄りがくつろいで過ごせる宅老所「なごみ」の改築を行い、１人でも多くの元気なお年寄りの拠り所にしてもらいたいと思っています。さらに順次、高齢者、障がい者の福祉施設を整備して参ります。他にも地域包括支援センターを中心に、きめ細やかな訪問医療･介護サービスを提供しています。

給付型奨学金制度で子ども達の可能性を広げたい

小澤　子育て世代に対しても、だいぶ手厚い支援を行っているそうですね。

黒澤　保育園の保育料の軽減、学校給食費の補助に関する提案は、議会でも賛意を得られそうです。児童館も充実していて、小学生になっても共働き世帯は安心して子どもたちを預けることができます。

小澤　公約の一つに給付型奨学金の創設がありますね。

黒澤　高校までは、親が頑張れば何とか出してやれるけど、大学となるとハードルが高くなります。昔はお金がなければ大学はあきらめるのが普通でした。でも今はなんとかして入学だけはさせるけど、後が続かず、家庭崩壊などの深刻な問題を引き起こすケースが多々あります。一番お金のかかるときこそ、町の支援が必要ではないかと思い、給付型奨学金制度を思い立ちました。

小澤　優秀な子どもたちの可能性を広げてあげるものですね。

黒澤　子育ては親だけでなく、地域の力も必要です。みんなで育てた人材が戻ってきて、町のために働いてくれることが私の目標のひとつです。

「あそこに行くと面白く頼りになる」と言われる役場づくりを

小澤　お話を聞いて、町が大きく変わろうとしている、そんな気がします。

黒澤　経営者の時は、とにかく利益を追求すれば方向は必ず見えてきました。でも、町長は町民の利益が最優先でなければなりません。民間と違うのは、先に予算としてお金があること。しかもそのお金は税金です。一円も無駄にせず、慎重かつ大胆に有効活用することがとても大切だと肝に銘じ、職員にもよく言い聞かせています。

小澤　利益というモノサシがない以上は、町民にとって何が利益かを把握することが大事ですね。

黒澤　西日本を襲った豪雨災害のような事態が起こった時、町民がまず頼りにするのは役場です。町の中のいかなる問題に対しても、トップの私はもちろん、職員たちも住民利益最優先で物事を考えなければなりません。そのためにも、日ごろから庁内のモチベーションを高く維持し、職員や町民が一緒になってアイデアを出し合って地域振興に取り組んでいきたいですね。そして、「役場に行くと面白いね」と言われるようなまちづくりを行っていきたいと思います。

小澤　民間の発想や感覚を役場に導入して、住民、産業、行政が三位一体で元気な小海町を実現しようとしている町長の明るく積極的な姿勢が印象に残りました。これからの町の発展を心よりお祈りいたします。本日は貴重なお話をありがとうございました。